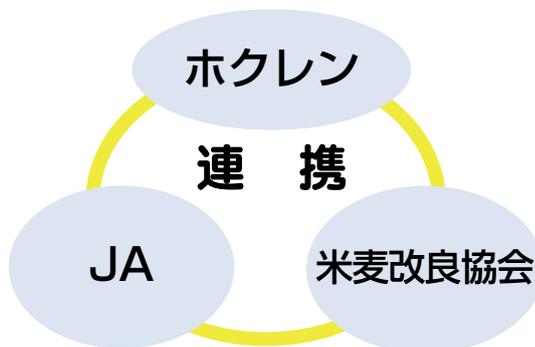


# 北海道小麦の収量増加と安定生産の 確立に向けて (平成30年産 試験結果)



- ・ 反収UP
- ・ 品質・量ともに安定供給



<30年産>

地区	JA	品種	課題
苫小牧 札幌	とうや湖 道央	きたほなみ	基肥でのBB肥料の効果確認
		春よ恋	基肥窒素及び窒素分追肥の効果確認
岩見沢	いわみざわ	きたほなみ	幼穂形成期追肥の効果確認
		春よ恋	窒素追肥の効果確認
帯広	鹿追町	きたほなみ	基肥での緩効性肥料の効果確認
	木野	きたほなみ	幼穂形成期追肥の効果確認
		ゆめちから	
北見	びほろ	きたほなみ	生育量に応じた追肥体系の効果確認
		春よ恋	幼穂形成期追肥の効果確認

**ホクレン・JA・北海道米麦改良協会**

# JA道央 (春よ恋)

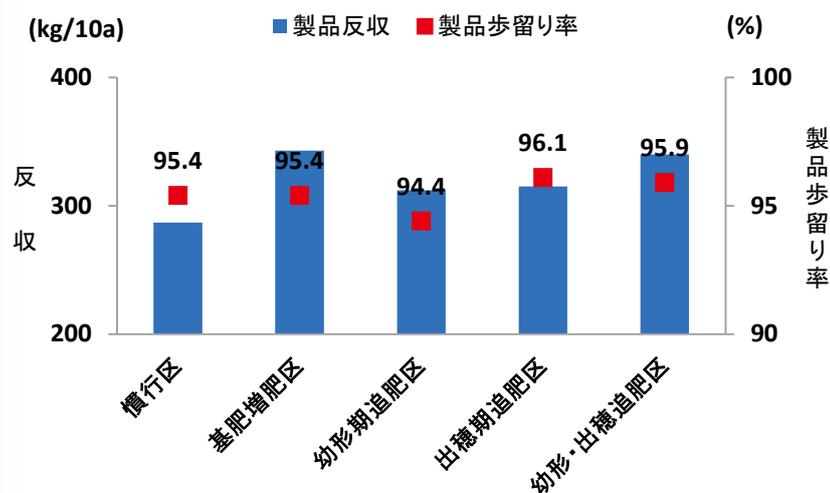
## 1. 試験内容 (田中氏)

<低地土>

区名	窒素施肥量 (kg/10a)			合計
	基肥	*幼穂形成期	**出穂期	
慣行区	8	—	—	8
基肥増肥区	12	—	—	12
幼形期追肥区	8	4.2	—	12.2
出穂期追肥区	8	—	4.2	12.2
幼形+出穂期追肥区	8	2.1	2.1	12.2

\*5月21日、\*\*6月17日に追肥

## 2. 収量結果



## 3. 試験結果

- ①反収は、慣行区よりいずれの区も上回った。  
千粒重は出穂追肥区が他区よりやや重かった。
- ②窒素の増肥により多収となることを確認できた。基肥増肥区および幼形+出穂期追肥区で反収が高かった。

## <コメント>

- 経済性の試算では、幼形+出穂期追肥区の収益性が高いが、遅れ穂が増加するリスクがある。
- 低地土では基肥増肥区の効果が高いことを再確認できた。

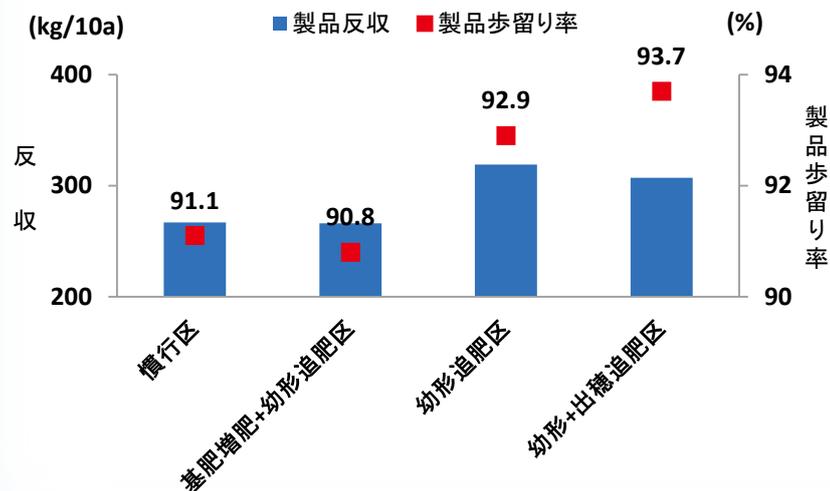
## 1. 試験内容 (平野氏)

<泥炭土>

区名	窒素施肥量 (kg/10a)			合計
	基肥	*幼穂形成期	**出穂期	
慣行区	6	—	—	6
基肥増肥+幼形期分追肥区	8	2.1	—	10.1
幼形期追肥区	6	4.2	—	10.2
幼形+出穂期追肥区	6	2.1	2.1	10.2

\*5月22日、\*\*6月23日に追肥

## 2. 収量結果



## 3. 試験結果

- ①反収、千粒重とも幼穂形成期追肥、幼形+出穂追肥区が慣行区を上回った。
- ②泥炭土では、基肥窒素6kg/10aから幼穂形成期追肥の増肥で増収することを確認できた。

## <コメント>

- 生育・収量データとも播種機の不具合により、出芽ムラや雑草の影響を受け、再検討を要する。

# JAいわみざわ

## 1. 試験内容（伊藤氏）

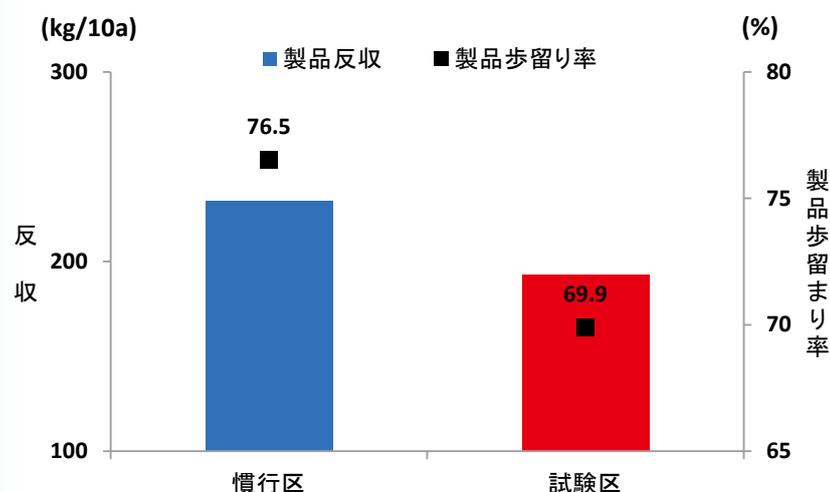
### <春よ恋>

(単位: kg/10a)

項目		慣行区	試験区
播種日	播種量	4月24日 15	
基肥	基肥	BB082M 70 (N-7.0,P-12.6,K-8.4)	
追肥	5月23日	7	7
	6月16日	4	-
N合計		18	14

5/23 尿素、6/16 硫安を追肥

## 2. 収量結果



## 3. 試験結果

- ①試験区の反収は、慣行区より6.6%、製品歩留り率でも6.6ポイント下回った。
- ②試験区は、m<sup>2</sup>当り穂数が32本多かった。また、一穂粒数は少なく、千粒重は軽かった。
- ③6月16日の追肥無しが養分不足となり、反収に影響したと思われる。

### <コメント>

- 開花期以降、多雨による影響が大きく、低収年となった。

## 1. 試験内容（新田氏）

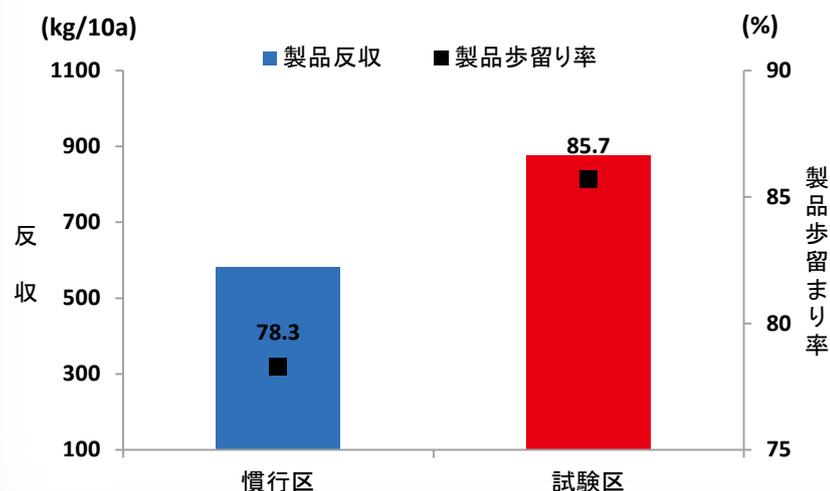
### <きたほなみ>

(単位: kg/10a)

項目		慣行区	試験区
播種日	播種量	9月5日 (大豆間作) 7.7	
基肥	基肥	なし	
*追肥	起生期 (4/10)	8	4
	幼穂形成期 (4/29)	6	8
	止葉期 (5/24)	4	4
N合計		18	16

\*4/10 硫硝安、4/29 BBNK20、5/24 硫安

## 2. 収量結果



## 3. 試験結果

- ①反収は、試験区が51%、製品歩留り率でも7.4ポイント上回った。
- ②千粒重は、試験区が慣行区より3.2g (39.5g) 上回った。
- ③検査等級は、両区とも1等であった。

### <コメント>

- 「きたほなみ」は、穂数を過剰にせず一穂粒数と粒重を充実させることが大切である。
- 起生期追肥を抑えて幼穂形成期追肥を重視した体系が、収量・品質向上に結び付くことを確認できた。

# JA木野 (きたほなみ)

## 1. 試験内容 (中谷氏)

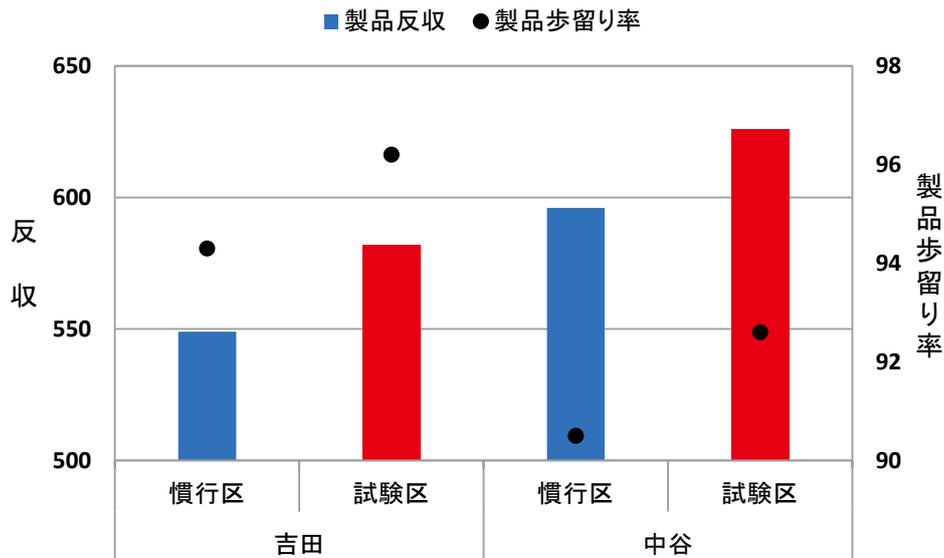
(単位 : kg/10a)

農家名	区 別	基 肥	追 肥			N合計
			起生期	幼穂形成期	止葉期	
*吉田	慣行区	BB131Cu 55 (N-5.5,P-16.5,K-4.2)	4	2	4.2	15.7
	試験区		—	6	4.2	15.7
**中谷	慣行区	BB602Cu 80 (N-4.8,P-24.0,K-9.6)	4.2	2.1	4.2	15.3
	試験区		—	6.3	4.2	15.3

\*起生期4/11, 幼穂形成期5/6, 止葉期5/29

\*\*起生期4/9, 幼穂形成期5/1, 止葉期6/6

## 2. 収量結果



## 3. 試験結果

### <吉田>

- ①両区とも稈長や穂長、穂数、草姿で見た生育の差は見られなかった。
- ②収量、製品歩留り率、千粒重共、試験区の方が上回った。両区に子実タンパクや容積重の差はなかった。

### <中谷>

- ①収量、製品歩留り率、千粒重、容積重は、試験区の方が上回った。
- ②試験区の方が登熟後半まで光合成能力が維持されたと思われる。

### <コメント>

- 両圃場共、幼穂形成期重点追肥の方が有効であると判断される。



# JA木野 (ゆめちから)

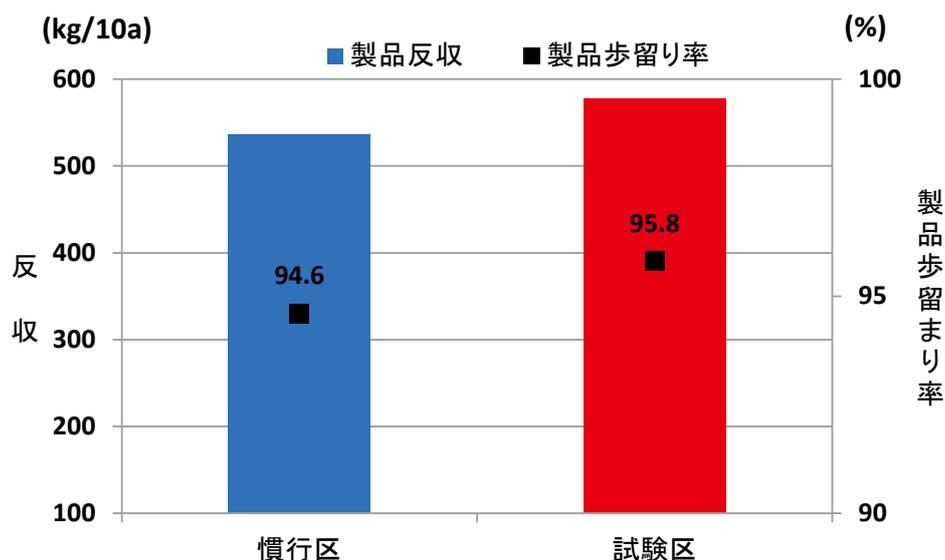
## 1. 試験内容 (中島氏)

(単位 : kg/10a)

項目		慣行区	試験区
播種日 播種量		9月27日 13	
基肥	基肥	BB800Cu 50 (N-4.0,P-15.0,K-5.0)	
追肥	*起生期 (4/14)	9.2	—
	*幼穂形成期 (4/25)	—	9.2
	**止葉期 (5/30)	5	5
N合計		18.2	18.2

\*尿素 \*\*硫安

## 2. 収量結果



## 3. 試験結果

- ①試験区は、反収で8%、製品歩留り率でも1ポイント上回った。
- ②両区に千粒重、容積重、子実タンパクの差はなかった。

<コメント>

- 起生期の茎数が確保されていれば、受光態勢の向上や反収の面から幼穂形成期近くまで追肥を遅らせる方が有効と思われる。



# JAびほろ (春よ恋)

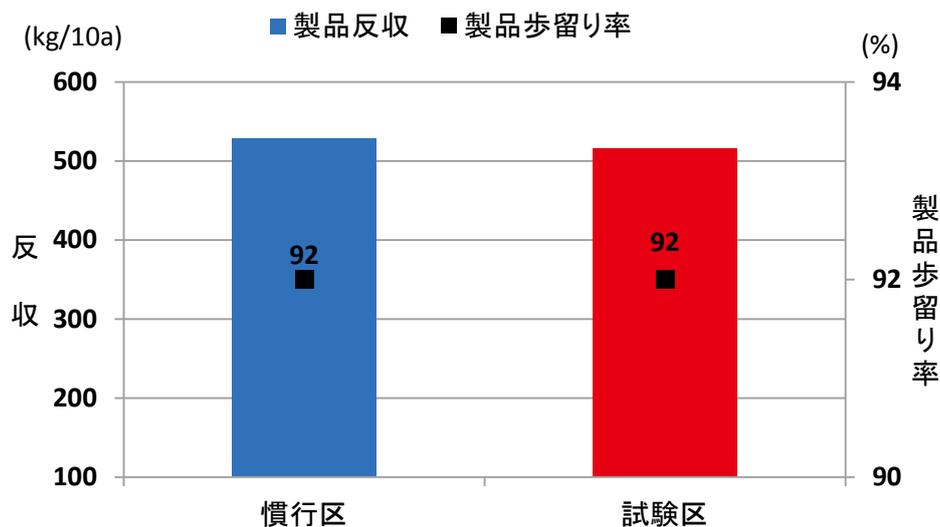
## 1. 試験内容 (平岡氏)

(単位 : kg/10a,mg/100g)

項目	慣行区	試験区
播種日 播種量	4月14日 12.4	
土壌診断 (熱水抽出性窒素)	6.4	
基肥 (成分)	BB083c 75 (N-7.5,P-13.5,K-9.75)	
*追肥	—	2.1
N合計	7.5	9.6

\*5月25日 硫安

## 2. 収量結果



## 3. 試験結果

- ①反収・製品歩留り率共、慣行区と試験区の差はみられなかった。
- ②子実タンパクでは、試験区が慣行区より0.4ポイント低かった。
- ③播種量に対する出芽率は試験区、慣行区ともに50%台と悪かった。
- ④幼穂形成期の生育は概ね同等だったが、成熟期の稈長では、試験区が長かった。

### <コメント>

- 試験区、慣行区ともに出芽率が低かったため、不齊な株数や生育が、追肥の作用を打ち消されたと推測される。



# JAびほろ (きたほなみ)

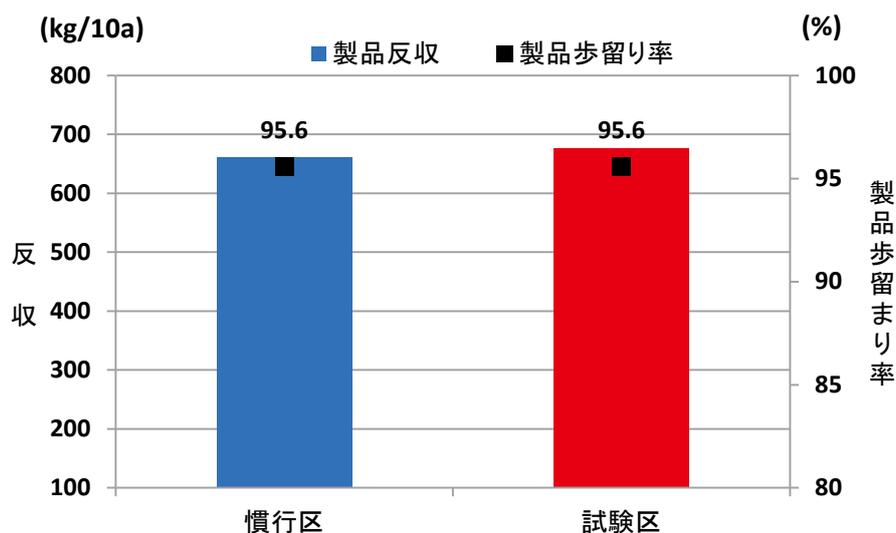
## 1. 試験内容 (寺崎氏)

(単位 : kg/10a)

項目		慣行区	試験区
播種日 播種量		9月27日	
		9.0 (222粒/m <sup>2</sup> )	7.5 (185粒/m <sup>2</sup> )
基肥 (成分)		MS868Ca 70 (N-5.6,P-11.2,K-5.6)	MS868Ca 60 (N-4.8,P-9.6,K-4.8)
追肥	*起生期	サミットコートN30 40(N12) 硝カル20 (N2.8)	硫安 40 (N8.4)
	**幼穂形成期	—	硫安 15 (N3.2)
N合計		20.4	16.4

\*4月15日、\*\*5月18日に施用

## 2. 収量結果



## 3. 試験結果

- 起生期以降の莖数、穂数は試験区が下回った。  
また、成熟期の穂数は慣行区がやや多かった。
- 反収は、試験区の方が2%上回った。製品歩留り率では、差は見られなかった。

### <コメント>

- 試験区は、総窒素量で4kg/10a下回るが、子実タンパクからみると、窒素量の過不足はみられない。
- 慣行区に比べ、播種量・窒素量を低減した栽培法は、慣行区に比べ遜色はないことが確認された。  
資材投入量の削減・生産コスト軽減から試験区の方が経済的にも優位である。



# JA鹿追町 (きたほなみ)

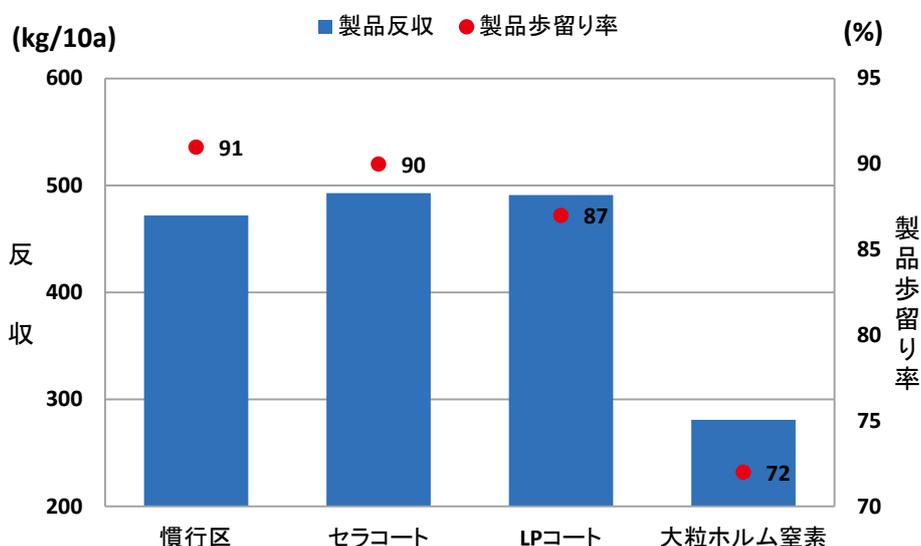
## 1. 試験内容 (中瓜幕)

(単位 : kg/10a)

区 別	基肥 (9/27)	N追肥 (硫安)			窒素合計
	成 分	*起生期	**幼穂形成期	***止葉期	
慣行区 (H674cu)	(N-3.2,P-13.9,K-2.3)	3.2	3.2	3.2	12.6
セラコート区	(N-15.0,P-20.0,K-10.0)	—	—	—	15.0
LPコート区		—	—	—	15.0
大粒ホルム窒素区		—	—	—	15.0

\*4/11, \*\*5/30, \*\*\*6/14

## 2. 収量結果



## 3. 試験結果

①反収では、慣行区に比べ、大粒ホルム窒素区を除く区が同等か上回った。

また、製品歩留り率でも反収とほぼ同じ傾向であった。

②慣行区にくらべ、フォーリングナンバー、灰分は同等であったが、子実タンパクではセラコート区、大粒ホルム窒素区がそれぞれ0.3~0.5ポイント上回った。

### <コメント>

●慣行区に比べ、大粒ホルム窒素区を除いた緩効性窒素区は、追肥の労力を考慮すると経済効果はあると判断できる。

